

がその場合、配線による交流障害を除くのに困難を感じることが案外多く、又それに要する費用も馬鹿にならない。私達はそれらの点に着目し、受信部に送信機を置き、監視室に受信増幅機を設けた無線方式による装置を試作し所期の目的を達し得たので報告する。本装置は従来使用中の監視装置に送信、受信装置を取付け総合周波数特性を40～100c/sの範囲にしたもので、周波変調はFM方式としアンテナ出力は電波法による無免許の範囲内とした。尚本装置と市販の所謂ワイヤレスマイクや、最近発売されるトランシーパー等とは、その目的上総合周波数特性等の点に於て相異なるものである。

154. (示) 子宮収縮に関する研究、

特に多誘導式外測法について

(自衛隊中央・国公共連三宿)

石原 力, 岡富 峻

我々は Guard-ring 式 Multichannel-Tocodynamometer を製作し部位的特異性に関し各期の陣痛を検討した。本装置は3素子の外測法と1素子の内測法(Ballon法)即4素子を同時に記録し得る。この検圧器は各々中央に可動部の直径2.5cm, Guard-ringの直径は7.5cmの同心円をなし可動部とGuard-ringの部分が同一平面上にて、可動部の上下の変位により Strain-Gauge の抵抗の変化を電氣的に増巾記録する。Strain-Gauge は耐湿性、耐熱性で直線性広く電氣的安定性もあり長時間の記録も可能であり、又腹圧、呼吸の影響を出来るだけ除去し得る様に Filter を用い4 cycle 以下を各段階で Cut し可及的に子宮収縮のみを熱ペン式記録器で記録する。

この器械を子宮底部、中部、下部に同じ圧力で固定すべく電氣的に調節し各々子宮部位(底・中・下部)に於ける振巾の強さを初産6例、経産4例(分娩Ⅰ期4例、Ⅱ期6例)の10例を比較検討した。即分娩Ⅰ期に於ける子宮底優位性24.3%, 中部優位性75.7%, 下部0%, Ⅱ期では底部59.2%, 中部40.8%, 下部0%で各部位の収縮の強さは一様でなく且分娩Ⅰ期とⅡ期でも異なる。この事は Reynolds 等の分娩Ⅰ期とⅡ期での子宮底優位性に対し中部優位性を示し、Ⅱ期では Fundal Dominance を示しているが、この点胎児の位置との関係及子宮壁の伸展性にも関係があるか、引き続き検討し、この外子宮収縮開始時間の部位的差及左右の優位性について報告する。

155. (示) 分娩前後の尿中カテコールアミンの

消長

(札幌医大) 篠原 護, 足立 昇
高野純一, 村山寛子

分娩前後に於ける尿中カテコールアミンの消長は、分娩経過の様相との関係のみならず、これとは独立してカテコールアミンの分泌及び代謝の研究上極めて興味深い。

本邦に於いては、村上(金沢大)の研究があり、アドレナリンの Oxytocin 分泌抑制作用を考えているが、一方アドレナリンの妊娠子宮に収縮的に作用するという報告もある。

吾々は今回正常産(11名)及び狭骨盤等の他覚的原因を有せざる分娩遷延妊婦(16名)の尿中カテコールアミンを時間的に採尿し、これを測定した。

その結果は正常に経過せる群に於いては、アドレナリン、ノルアドレナリン(以下A., NA.)とも陣痛発来中既に高く、単位時間当りの排泄量は、分娩後の数日間のそれより高い。分娩後のA. 排泄量は単位時間当りでは第1日は第2日より高い。NA. はA. に反し産褥2日目に高い傾向をもち、両者の間に相違が認められた。

分娩遷延群に於ても、A. NA. の消長を分娩第Ⅰ期及びⅡ期の時間、出血量、初産及経産婦別等に就て検討した。

又正常異常両群に就いてA. よりもNA. の変化が大きい結果を得た。

以上の結果を一括して述べる。

156. (示) 分娩状況と胎盤組織酸素消費能との関連について

(東京柳橋病院) 田中 稔

(東大分院) 滝本巖, 佐藤 正憲

胎盤は母体と胎児との間で呼吸、排泄、栄養、生物学的防禦、貯蔵及びホルモン分泌等の重要な機能を営み、妊娠の継続と分娩に密接な関連がある。胎盤の諸機能は胎盤の活動状態に左右されると云え、その活動状態は胎盤自体の組織呼吸に影響されると云つても過言ではない。

実験方法は、胎盤娩出直後に胎盤母体面の酸素消費能を Warburg の直接法により測定した。

私等は妊娠週数、晩期妊娠中毒症、新生児の性・仮死・奇形、死産、生下時体重、胎盤・重量、分娩所要時間、分娩時出血量等の分娩状況と胎盤酸素消費能との関係について検討したのでここに報告する。

157. (示) 分娩の種類と児の予後に関する研究